Hero

巻波 彩灯

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

エルゼとリンゼがまだ旅の仲間と出会う前の話――。

とある青年と出会ったことをきっかけに、姉妹は激戦に次ぐ激戦の嵐の一日を駆け抜けていく。

――ヒーローは必ず現れる。そんな幻想を夢見て良いのか。

目次

序章 …… 1
第一章 …… 4
第二章 …… 14
第三章 …… 21
第四章 …… 27
第五章 …… 36
第六章 …… 50
第七章 …… 59
終章 …… 68

序章

朝の騒がしさが少し落ち着いた頃、とある喫茶店にて。

金髪を長く伸ばし色の違う瞳を持つ少女――ユミナ・エルネア・ベスファストは長椅子に腰掛け、縁に花柄の絵が装飾された白磁器のティーカップを優雅に持ち上げる。

「……お二方にお尋ねしたいのですが、冬夜さんと出会う前はどんな生活を?」

何気なく問いかけては、ティーカップに入っている紅茶を口に含むユミナ。

テーブルを挟んで、彼女と対面しているように座っているのは、銀髪に翡翠の瞳で顔立ちがよく似た少女たちだ。一見して分かるのは、髪の長さ程度で見分けが付かない。

「どんな生活ってね……あの頃の話は、思い出したくもないわ」

銀髪のロングヘアーの少女――エルゼ・シルエスカは、頬杖をついてお世辞にも行儀がいいと言えない姿勢で言い返す。包み隠さず嫌悪の表情を浮かべていた。

「私も……あ、でも、少しだけ良い思い出というか人というか……」

エルゼの右隣りに座っていた彼女と瓜二つの顔立ちをしている銀髪のショートヘアーの少女――リンゼ・シルエスカも最初は遠慮気味に言っていたが、途中で何かを思い出したようだ。

「何？　まさか、〝アイツ〟のことじゃないでしょうね？」
眉根を寄せて、実の妹であるリンゼに対しても睨み付けるエルゼ。
もっともエルゼの言う通りらしく、リンゼは首肯する。「そうだよ、〝あの人〟のことだよ……今でも元気かなぁ……」窓辺を見つめて呟く。
「お二方が仰っている〝あの方〟とは一体……？」
二人の会話を静かに聞いていたユミナが形のよい片眉の尻を上げる。
彼女の好奇心を刺激してしまったと悟ったエルゼは一つため息を吐いた。できれば、二度と思い出したくなかった――そう言いそうな胡乱な目つきでユミナから視線を逸らす。
「冬夜さんと出会う前に、私たちを助けてくれた人がいたんです」
エルゼの意を介せず、リンゼはユミナの疑問に答える。「ちょっと、話すことないでしょ」若干の苛立ちを含ませながらエルゼは返答した声の主へ目を向けた。
「でも、話さないことはないじゃないでしょ？」
姉の睥睨にもめげるどころかキッパリと反論する。これにはエルゼも頬を歪めるぐらいしかできない。
「ふふっ、本当に羨ましいですね。兄弟や姉妹がいる方は」
この場で唯一兄弟も姉妹もいないユミナが、二人のやりとりを見て微笑む。彼女の言

う通り、瑠璃と翡翠の瞳には羨望の光が宿っていた。
「それで良ければ、その方のことを話してくれませんか？」
文字通り箱入り娘だったユミナは外への好奇心――執着にも似た感情を持っている。だから、旅をしていた八重や冒険者として生計を立てていたシルエスカ姉妹には興味を持ち、こうしてせがむことがある。
今回だけは話したくないと思っているエルゼはどう躱そうか思案するが、隣にいるリンゼは迷うことなく了承した。
「良いですよ……ね？　お姉ちゃん？」妹の言葉に圧を感じ、とうとう折れるエルゼ。
「良いわよ。ったく、あんな奴のこと、思い出したくないけど」とても不満げではあるが、話し始める。
「あれは、冬夜に会う一年ぐらい前のことかな……」
語り始めたエルゼの口元はどこか嬉しそうに緩み、声もまた楽しそうに弾んでいた。
――内緒だけど、話す機会ができて嬉しい。その気持ちをひた隠しにしているつもりで。

第一章

時は遡り一年前――土で固められた地面に楕円のように塀や観客席が周りを囲んで天井がない建物で、金属や肉が激しくぶつかり合う音が鳴り響き、時には赤い液体が飛び散る。

その様子に観客たちは興奮し、さらに肉を潰すように要求する。そして、要求通り肉は潰され、地面が赤く染まっていく。

金属と血の臭いが入り混じる闘技場に、場違いなほどに気弱そうな少女――リンゼは会場を見つめる。――この試合が終わったら、次は姉の出番だ。不安でもう既に目尻には涙が溜まり、服の裾を強く握りしめていた。

試合終了の鐘が鳴り、倒れて動かなくなった者を屈強そうな男が引きずって退場させ、小柄で細身の男性たちで血の処理を軽く済ませる。

準備が終わったら、次の試合をする選手が入場する。リンゼは目を凝らして、入場する選手を見つめた。

視線の先には自分とよく似た容姿――双子の姉であるエルゼを認める。彼女は自信満々なのか、堂々とした姿で闘技場の中央へ歩み寄っていく。

両親が急逝した為、自分達で稼がなければならくなり、こうしてエルゼが闘技場で賞金を稼いでいる。しかし、常に彼女の身を危険に晒しているこの稼ぎ方は、かなり反対していた。

それでもエルゼは「頭悪いけど、拳には自信あるから！」と言って、自分にしかできないことだと信じてやまない。迷いなく突き進む姉の姿は憧れでもあるが、今は心配しかないのだ。

リンゼは胸の前に両手を組んでは、目をきつく閉じて祈る。――どうか今日も無事で終わりますように。

試合開始の合図が告げられた。

リンゼの祈りを知ってか知らずかエルゼは、開始と同時に地面を強く蹴り飛び出す。

相手はエルゼよりもはるか高く、服の上からでも分かるほど鍛え上げられた肉体を持つ青年。

だが、エルゼには関係ない。相手がどんなに体格が優れている人間だとしても今まで倒してきた。スピードと拳の威力は誰にも負けない――そんな自信が彼女を支えている。

いつも通り、突進からの拳を突き出す。青年の鳩尾を目指した突きは、真っ直ぐで鋭利。確実に相手の急所を貫くような威力だ。これは勝った――そんな確信すらエルゼ

にあった。

けれど、彼女の確信や自信は脆く崩れ去る。いとも簡単に避けられたからだ。

彼女の突きのスピードは決して遅いわけではない。むしろ、同い年以上の男性よりも速く、今まで躱せる者がいなかった。

それ以上に青年の反応速度が勝ったのだ。これにはエルゼだけではなく、観客の多くがどよめく。「おいおい、あのお嬢ちゃんのパンチを躱しやがってぜ?」だが、一部の者は「惟真なんだから、あれぐらい当たり前だろ」と一蹴する。

当のエルゼは、驚きつつも既に突き出した右拳を素早く引き、その溜めを使って左のストレートを青年に叩きつけようとする。だが、これも回避されてしまった。

またもや躱されたことに、エルゼは鼻白む。今まで当てて効かないという相手はいたものの、当てられない相手はいなかった。自慢の拳は当たらなければ意味がない。

焦りが彼女の動きを阻害する。力みから先程よりも大振りになり、速さを損なう。当然、当たるわけはなくあっさり避けられて、余計に頭に血が昇る。

冷静さを失ったエルゼは闇雲に乱打するだけで、青年の体に一回も当てられない。しかし、不思議なことに隙だらけのエルゼに青年は一切手を出さなかった。

――舐められている。これもまた彼女の冷静さを喪失させる一端となり、さらなる力みを生む。

力みは速さの最大の障害だ。最初の洗礼した突きを繰り出していた少女の姿はなく、今は力まかせに振り回しているだけ。それは次第にエルゼの体力を消耗させていく。

果ては拳を振るうのが精一杯となる程に息が上がり、筋肉が疲労していた。それでも眼光は鋭く、目の前の青年を睨めつける。

青年はエルゼに睨まれても黒緑の瞳で冷静に彼女を見つめ返す。肩は上下しておらず、額には一切汗を流していない。とても余裕そうだ。

そんな青年の態度が気に入らないと同時に、エルゼの胸の内から悔しさが込み上げてくる。今までどんな屈強な男性をもろともしなかった自分の実力、積み上げてきた自信がいとも簡単に崩れ去ると思っていなかったからだ。

今度こそ絶対に当てる――そんな決意と共に最後の力振り絞って、エルゼは右の拳を振るう。大振りで鈍重な拳、ようやく肉の感触がしたが次の瞬間にはエルゼの視線が低くなっていた。

一体何が起きたか分からないエルゼ。体を動かそうとしても動かない。

右腕が固められていると自覚した頃に、青年の声が耳朶を打つ。「降参しろ」冷たく淡々とした要求。飲み込めるはずがなく、「嫌に決まっているでしょ！」声を荒げた。

「そうか、なら腕一本は覚悟してもらおうか」

拒否された青年は、特に感情を込めずエルゼの右肘を本来曲がらない方向へと力を加

える。骨や靭帯が危険信号を発し、エルゼに痛みとして知らせる。
最初は堪えれられた。けど、少しづつ増す痛みと腕が折られる恐怖に屈し、やがて戦意を失った。
「……)、降参」
微かなに紡がれた言葉を聞き取れたのか、青年は折ろうとした力を緩めていく。そして、審判と目を合わせて「彼女は降参した。もう戦えない」と告げた。
彼の言葉に審判を務めている男性は右手を掲げ、鐘を叩く係に鳴らせる合図を送る。戦いの終結の音は、迷いなく鳴らされた。
場内は歓喜と驚嘆、罵倒が入り混じり騒然と化す。喧噪の中、リンゼ一人だけが安堵のため息を吐いた。
たった一人の姉がほぼ無事でいられたことに。負けてもそれが大事だから。
それからエルゼとリンゼはエントランスで合流した。
「ごめん、リンゼ……負けちゃった」
申し訳なそうに笑みを浮かべるエルゼ。「ううん、お姉ちゃんが無事で良かった」彼女の胸へと飛び込みリンゼは顔を埋める。微かに体が震えていた。
「心配かけちゃったわね。でも、平気よ。右腕は何ともないから」
左手で妹の頭を優しく撫でてながら、固められ、極められた右腕を何事もなかったか

のように回す。
先程、青年に向けていた鋭さはなく、柔らかく温かみのある眼差しでリンゼを見つめていた。
「右腕は何ともなかったのか、それは良かった」
聞き覚えのある声、今一番聞きたくない声がエルゼの耳に届く。振り返ると、黒緑のウルフカットのようなショートヘアーに髪と同色の瞳、タレ目ながらも目つきが悪い長身で筋肉質な青年――先程の対戦相手が立っていた。
エルゼは眉間に皺を作り、嫌悪の表情をそのまま彼にぶつける。「何であんたがいんのよ!?」口調も必然と厳しい。
姉の反応にリンゼは顔を上げ、青年と顔を合わせた。「あ、あなたは……」エルゼと違って敵意はなく、目を大きく見開いて驚くだけ。
「いや、さっきは流石にやりすぎたなと心配で来て……って、お前ら顔似てんな」
「そりゃ双子だもん、似ているでしょ。そんなことより、さっきはよくも……!」
エルゼの目は吊り上がり、眉根がさらに寄る。リンゼを解放し、大股で青年へと歩み寄っていく。瞳の奥はプライドをへし折られたことによって憤怒の炎が燃え上がっていた。
「ああ、だから腕をやったことはあや」

「違う！　何で本気で戦わなかったの!?」

腕よりもまともに戦ってもらえなかったことに激憤するエルゼ。今までの相手は、容赦なく向かってきた。それが当然の場所だから。けれど、この男はひたすら避けて、まともに戦おうとしなかったのだ。

それが最も許せなかった。立派な拳闘士だと自負していたからこそ、この敗北は大きい。

対して青年は、自分の胸辺りもあるかないかぐらいの少女から目を逸らさず、じっと見つめる。短いの沈黙の後にため息を吐いた。「何で俺がお前に本気を出さなきゃいけないんだ？」衝撃的な一言がエルゼの胸を突き刺す。

「なっ……本気の相手に本気でぶつかり合うのが礼儀でしょ！　それは子供でも大人でも関係ないわよ！」

一瞬、言葉を詰まらせるが何とか言い返す。だが、内心はさらに今まで積み上げたものが、当然だと思っていたものが崩壊する音を立てていた。

この男はどこまで人を馬鹿にすれば、気が済むのか――ただひたすらに不快な思いが胸を駆け巡る。

「確かにお前の言う通り、本気の相手に本気でぶつかり合うのは当然だな」

「なら、どうしてっ！」

「でも、俺は年端いかない女の子をボコボコにして楽しむ趣味なんてない。悪いがお前と俺とじゃ、あまりにも体のつくりが違いすぎる。とてもじゃないが勝負にならない」

淡々と語られる青年の意見にエルゼは呆然と聞き入れるしかない。言い返せる程、実力がないのは自分がよく理解している。だからこそ、血が出てもおかしくないぐらいに唇を噛み締めるしかなかった。

「大体、子供と大人が戦った時、怪我するリスクが高いのは子供の方なんだぞ。体が出来上がってもいないのに無理して大人の攻撃を受ければ、大怪我どころで済ませらないんだ」

エルゼの気持ちを察してか察していないか青年はまだ語る。これだけは頑として譲らないという強い意志が言葉の端々から感じられた。

「それでも、流石に右腕の事はやりすぎたな。悪かった」

と言って、頭を下げる青年。エルゼは面を食らって、さらに何も言えなくなった。頭の中はもう既にぐちゃぐちゃになっており、言葉という言葉が紡ぎだせない。だから、何かを言おうとしても口をパクパクと動かすだけで音は発せなかった。

自分が今まで生きてきた世界と違いすぎる青年の価値観が、鈍器のように重たく、刃のように鋭く価値観を壊していった。再構築するには時間が欲しいところ。

そんなエルゼから何も言われないことを察したのか、青年は頭を上げて「じゃ、今度

また会う時を楽しみにしている」と彼女の傍らを通り過ぎる。だが、彼を引き留める声があった。

「ま、待ってください！」

ずっと黙っていたリンゼが開口して最初に言った言葉。青年は足を止め、リンゼの方へ振り返る。

「あの、その……ありがとうございました！」

おどおどしながらも頭を下げ、感謝の意を伝える。「俺は何もしていないぞ？」青年はリンゼの意を汲み取れず、眉を顰めた。

「ええっと……お姉ちゃんを傷付けないで……無事なままで……」

顔を上げたリンゼはあたふたし言葉が見つからないまま理由を述べる。彼女の言葉に青年は困惑気味に右手で後頭部を掻き、改めて彼女たちに体を向けた。

「まぁ、別に感謝されることをした覚えはないんだが……」

「そ、それでも、お姉ちゃんはたった一人の家族で……だから……」

溜まっていたものが噴き出したのか、リンゼの目からはポロポロと涙が流れていく。今まで怪我または死すらも覚悟していたのだから、無理もない。まだ彼女は齢十二の子供だ。それを覚悟しろと言う方が酷だろう。

「……妹を大切にな」

慰める術を知らない青年はエルゼに目配せをする。エルゼもこの時ばかりは素直に従い、リンゼの頭を優しく撫でていく。

これだけ妹に無理を強いていたのかとただひたすらに恥と悔恨の念がエルゼを支配する。自分より弱いと分かっていたはずなのに、ここまで追い込んでしまって……姉失格だなと。

その姉妹の姿を見て、静かに立ち去ろうとする青年だが、一つあることを思い出し足を止めた。

「そうだ、お前に言っておかなきゃいけないことがあった」

青年はエルゼの方を見て言う。「打つ時は力を抜け。力を込める時はインパクトの瞬間だけで良い」そして、青年は彼女らに背を向け「達者でな」と右手を上げて軽く振る。

「あ、ちょっと待ってください、まだお名前を！」

三度、足を止める青年。「土谷惟真（つちやありま）だ」それだけ告げると足早に去っていく。

「土谷……惟真……」

二人は青年の名前を口にしながら、彼の背を見つめ続けていた。今まで出会ったことのない人間として、深く記憶に刻みつけて。

第二章

それから数日、エルゼは闘技場に足を運んでいた。前回負けた分を取り戻すことはもちろん、リベンジに向けて研究を重ねるために観客席から宿敵の出ている試合を観戦しているのだ。

リンゼも彼女に付いて行き、エルゼが試合に出る度に不安そうな顔をして見つめる。だが、最近一緒に観戦する機会が増えてきたことにより、自然と姉妹の会話も増えていて内心喜びを感じていた。

話題はもっぱらエルゼが敗北を喫した青年の話だが。それでも少しでも多く姉妹の時間が取れて嬉しいのだ。流石にそれは姉の前で表に出すわけにはいかないけれども。

「お姉ちゃん、次……」

「アイツの出番ね……今日こそアイツの弱点見つけてやるんだから！」

そう息巻いて目を皿にするエルゼにリンゼは笑いが堪え切れない。「何よ、リンゼ。何がおかしいの？」彼女の様子に気付いたエルゼは訝しげに眉根を寄せる。「ううん、何でもないよ。ただお姉ちゃんは変わらないなぁって思っただけ」昔から負けず嫌いな姉の姿を映す瞳は、憧憬と懐かしさが入り混じっていた。

「うっさいわね、負けっぱなしは性に合わないだけよ」
「ホント、お姉ちゃん、そういうところ変わらないよね」
リンゼの意図に気付いたのかエルゼは気恥ずかしそうに視線を逸らす。わずかに頬が紅潮している。
昔から気が強く喧嘩も強い姉。だけど、本当は恥ずかしがり屋で照れ屋な少女で、多分この世で一番可愛らしい女の子ではないかとリンゼは思う。
と、会話が一区切りしたところで試合開始の合図が鳴る。二人は試合場にいる惟真に視線を向けた。
二人の少女から熱い視線をよそに惟真は、開始直後に飛び込んできた相手のパンチを次々に躱す。
相手は惟真より背が少し低い男性だが、筋肉量は明らかに彼の倍以上ある。一撃の重さはエルゼの比ではない。
だが、エルゼよりも鈍重な拳は惟真の体を捉えられない。それどころか大きな隙を作ってしまうばかり。
相手が自分よりも年下でもなければ性別も同じ。エルゼの時のように打たない道理はない。
惟真は相手の突きを左腕で押して受けながら体を右手側に捌き、がら空きの胴に間髪

入れず右足で蹴り込んだ。
風を切り、空気が灼ける匂いすら感じ取れるような必殺の蹴り。
巨木がぶつかったかのように体を揺らす男性。
肉を打つ重々しい響き。
惟真が右足を地に着ける頃には男性は蹲り立てなくなっていた。低い呻り声が惟真の耳に届く。
「審判」
下段突きを男性の目の前で決め、審判に呼びかける。審判もこれ以上の試合続行は不可能だと判断し、右手を掲げた。
決着はあっという間に付いてしまった。けれど、観客は歓喜する。
惟真の無敗記録がまた一つ伸びて――二十四戦無敗、言い換えれば二十四連勝目の勝利を挙げたからだ。
「やっぱり凄いよね、あの人」
「……悔しいけど、あれは強いわ。あたしの何倍以上もね」
目的も終えた姉妹は闘技場を出て、買い物をするために屋台の方へ赴く。その道すがらで先程の試合の感想を述べ合っていた。
「だから、お姉ちゃんの時、手加減したかもね」

「そうね。あんな蹴りを喰らったら、間違いなく死んでたかも」
惟真と対戦した直後は憤死するぐらい腹立たしいことだったが、ここ最近の試合を見て思う。彼が全力で相手した時、確実に自分の体は壊されていただろうと。
これぱかりは素直に彼の実力を認めざるを得ない。だからこそ、絶対に越えなければならない壁とも認知していた。
「やぁ、そこのお嬢さん、今から買い物かい？」
エルゼが思案に耽っていた間に誰かが話しかけてきた。思考の海から脱したエルゼは、即座に声がした方へと顔を向ける。
そこにはブロンドの髪で項全体を隠すぐらい襟足が長い男性が、軽薄そうな笑みを浮かべてリンゼにちょっかいを出していた。「今からオレと遊びに行かない？　もちろん、オレの奢りでね」見ず知らずの男性に話しかけられて困惑するリンゼ。「えっと、その……私、今からお姉ちゃんと……」か細い声は強い否定にはならない。
「なぁに？　別にお姉ちゃんとは後で良いでしょ？」
男性の圧にリンゼは押されながらも「いや、でも……」と断りを入れようと努力する。それでも男性は軽薄な笑みのままリンゼの手を強引に掴み、連れ去ろうとした。けれど、その手は彼女の腕を掴むことはできず、反対に掴まれてしまった。
「ウチの妹に何か用？」

眼光鋭く睨みつけるエルゼ。このままだと確実にリンゼが押し切られると判断し、彼女を守るために半歩前へと出る。「アンタ、これ以上妹を困らせるなら、容赦しないからね」語気も鋭利で力強い。

「な、何だよ、お前……って、双子……？」

「そうよ。それで、ウチの妹から手を引いてくれるの？」

手首を握る力を強める。ただ一人の妹をどこの馬かも分からぬ輩に指一本も触れさせるわけにはいかない。姉としての責任感がエルゼを駆り立てる。

「分かった、手を引くよ」

あっさりと諦めた男性。エルゼはその手を離し、彼を自由の身にする。

しかし、エルゼの顔面に男の拳が飛び込んできた。エルゼは瞬時にダッキングで躱す。散らばる銀髪を拳が貫き、空を切る。

「何をするのよ！」

男性の行動に目を大きく見開き怒鳴るエルゼ。体は既に臨戦態勢へと入っていた。

男性は忌々しげに舌打ちをして、即座に拳を引き戻す。「決まってんだろ、力づくで奪うんだよ」だが、二撃目は叶わなかった。

エルゼの突きが胸、鳩尾と立て続けに直撃し、一瞬動きを止めてしまう。そこからは彼女の速さに追いつけなくなる。

先程のまでの軽薄な笑みは消え失せ、彼女に滅多打ちにされてから男性は戦意を喪失し、ただ顔の色を白くするだけ。

それを感じ取ったのか、エルゼも手を止めた。「今日はこれくらいにするけど、今度手を出したらダダじゃおかないからね！」眼光は鋭く、瞳の奥はまだ憤怒の炎が宿っている。

「くそっ！　覚えとけよ！」

男性は捨て台詞を吐いて脱兎のごとく速やかに退散した。しかし、事態はまだ終息しない。

「警備兵だ！　誰だ、街中で暴れた者は！」

年を重ねた分だけ低い声が響く。槍を持った軍服姿の男性たちがエルゼらの元へと駆け寄って来る。

「やば、逃げるよ、リンゼ！」

「に、逃げたら余計に悪くなっちゃうんじゃ……」

「捕まったって、どやされるのは一緒でしょ！」

エルゼはリンゼの手を引いて憲兵たちから逃げるように駆け出した。

――いつも、お姉ちゃんは私の手を引いてくれる。まるで囚われたお姫さまを助け出す王子さまみたいに。

手を引かれたリンゼは姉の背を見つめる。幼い頃からどこへ行こうとしてもエルゼが常にリンゼの前へと立ち、先程の男性から守ったように障害を叩き壊し、今のように手を引っ張って先導してくれていた。

リンゼはそんな彼女に憧憬と羨望を抱いていた。

ヒーロー――それがリンゼにとってのエルゼの存在なのだ。

第三章

「あ～、もう何て日よ！　別にあたしは悪くないってのに」
「だったら、逃げる必要はなかったんじゃないかな……」
結局、二人は警備兵たちに取り押さえられ――特にエルゼは男性と殴り合ったことを厳重に注意されてしまった。
そのため買い物が終わる頃合いには、すっかり日が暮れてしまっていた。人気もなくなっている。
「ったく、あのナンパ男、きっと警備兵に気付いて逃げ出したのね」
「それもあるけど、お姉ちゃんの攻撃が原因じゃないかな……？」
「そうだろうけど、アイツさっさと逃げた理由が……」
「ああ、確かにそうかも」
エルゼの言いたいことを察して、リンゼは納得し頷く。
姉の攻撃はかなり破壊力はあるし、実際男性も戦意を失っていた。だが、逃げる時の表情が姉への恐怖ではなく、警備兵に見つかってしまう焦りを浮かべていた。
だから、猛スピードで逃げて行ったのかと思うと納得できる。

「まぁ、でもやっぱりアイツと比べたら、強くなかったわ。あたしの拳をあんだけもらってるし、パンチも速くなかったし」
「あの人と比べたら、駄目じゃないかな……だって、二十四連勝している人だよ？」
「そりゃ、そうよね」
　曲がり角を曲がり、人気がない道を通る二人。彼女たちが泊っている宿への近道で、夜も近くなっていることから先を急ぐ。
　しかし、彼女たちは帰ることばかりに囚われすぎていて周囲への警戒心が薄れていた。
　次の瞬間、鈍い音が鳴る。
　エルゼは背後から殴られ、そのまま地に伏してしまう。後頭部から鈍痛が走り、脳が揺れているのか視点も定まらない。
「お姉ちゃッ！」
　倒れた姉を介抱しようとリンゼは駆け寄ろうとするが、後ろから羽交い絞めにされ身動きが取れなくなる。非力な彼女では拘束を解くことは不可能に近い。
「よお、さっきぶりだなぁ」
　背後の声に気付き、リンゼは見上げた。そこには先程リンゼをナンパしていたブロンドの髪の男性が軽薄な笑みを浮かべて、愉快そうに喉を鳴らしている。「やっぱり諦め

きれねえんで、探したんだぜぇ」碧眼の双眸はエルゼに対する侮蔑とリンゼに対する欲情が入り混じっていた。

「おいおい、こっちの長い方も良いモンだろ?」

もう一人の男性が口を開く。茶髪を短く刈り込み、筋骨逞しい屈強な体で手にはエルゼを殴ったものであろう棍棒があった。

「あん? そっちは闘技場でよく見かける女の皮を被ったゴリラだよ。昼間、ひでぇ目に遭ったぜ」

「ああ、なるほどな……ゴリラなら納得だわ。そりゃ、そっちの方が都合が良いな」

「だろ? 行く行くはイイ女になるぜ、こいつは……」

ブロンドの男性はリンゼに対して再び口の端を吊り上げる。その瞳からはもはや悪意しか発せられない。

男性たちの悪意を直に受けたリンゼは、守られてばかりの自分の無力さをただ痛感するしかなかった。

そんなリンゼに追い討ちをかけるように男性たちは動く。

「でも、一発ぐらいはお返ししねえと腹の虫が収まらねえわ」

「良いぜぇ、女は預かるから一発キツイのお見舞いしちまいな!」

リンゼはほんの一瞬だけ拘束が解かれる隙に逃げ出して反撃を試みようと思ったが、

その一瞬も屈強な男性が許さない。「ちょい待ち、お前の大切な人を置いて逃げても良いのかぁ？」男性の言葉に足が止まり、逞しい腕に抱かれては再び動けなくなった。

せめて時間を稼ごうと口を開くが音が伴わず、ただパクパクと動かしているだけ。無力感と恐怖が入り混じり、いつの間にか目尻に涙が溜まっている。

「さぁて、準備は良いよな？　ゴリラ女」

ブロンドの男性はエルゼを見下し侮蔑の笑みを浮かべた。そして、エルゼの横腹を思いっきり蹴り上げる。

男性の蹴りは日頃モンスターや人間と戦っている者よりも威力はないが、まだ十二になったばかりのエルゼの体には十分すぎるほどの一撃だ。

男性に蹴られたエルゼは為す術もなく転がり、勢いよく近くの壁に激突。体全体から空気という空気は抜け、力を失っては痛みが激しく主張する。

だが、痛みよりも人に蹴られた衝撃の方がエルゼの思考を遥かに鈍らせていた。人を何とも思わない瞳が彼女の心に突き刺さる。

「止めてッ！」

リンゼの口からようやく出た言葉は制止だった。いや、懇願というべきか。「お姉ちゃんを傷付けないで！」目尻に溜まっていた涙がポロポロと流れ落ちる。

「止めて、ねぇ……やぁなこった、コイツはオレを殴ったんだ。だから、オレが蹴り返し

たって文句は言えねえだろ」

と言いつつエルゼを蹴り続けるブロンドの男性。「悔しかったら、強くなるんだなぁ」茶髪の男性もせせら笑う。「もっとも、そんな機会はなんざこねえだろうよぉ」二人の男性は嘲笑し、少女を傷付けることを楽しむ。

「お願い……お願い、止めてぇ……な、何でもしますからぁ……」

涙声で訴えるリンゼだが、その言葉だけは言ってはいけなかっただろう。けれど、目の前で愛しい姉が永遠と傷付けられていく様は、彼女の心を折るに劇切だ。

止めどなく溢れる涙はリンゼの足元を濡らす。もう止める術は分からない。

「ふ～ん、何でもするかぁ……良いこと聞いたなぁ」

リンゼの言葉を聞き、ブロンドの男性はにやりと笑う。悪意に満ちた碧眼は品定めするようにリンゼをじっくりと見つめる。

しばしの沈黙の後、男性は口を開いた。「なら、もう帰るか。オレも大分スッキリしたことだし」もはやエルゼに興味を向けない。「この女なら姐さんも気に入ってくれるだろうしな」踵を返し、向かうべき場所へと足を運んでいく。

「んじゃ、退散ってことだな」

屈強な男性は言葉を言い終えるか終えないかの内に、リンゼを担ぎ上げブロンドの男性の後を追う。

もうリンゼには抵抗の意思はないため、簡単に担ぎ上げられた。そして、足取りは軽いままその場を立ち去る。

残ったエルゼは暗む視界の中で、リンゼを助けようと必死に目を見開き手を伸ばしていた。だが、その手は届くことはない。

意識は途切れ、視界は暗転。手も力を失い、地に着く。

最後に見たのは涙を流しながらもエルゼに向かって、懸命に笑顔を作っていた愛しき妹の顔だった。

第四章

薫風が幼い双子の姉妹の銀髪を撫でていく。髪が短い方の少女は長い方の少女にしがみつき、小さく悲鳴を上げる。普段、外に出ることが少ない故にか、そよ風程度でも驚いてしまう。

それには長い髪の少女も苦笑い。でも、そんなところも可愛い妹だから、守ってやらねばと思っていた。

――いつだって、そうだ。リンゼは気が弱く、すぐにいじめられる。だから、その度にあたしが守らなきゃって、思って戦ってきた。

――おかげで、女の子らしい服も似合わない女子になって、リンゼを羨ましいと何度だって思った。だけど、それでも愛しい妹を守れるならそれでいい。でも、あたしはさっき……。

エルゼの視界に入ったのは木目調の天井だ。今さっきまで見ていたものは夢だと知る。いや、過去の記憶とも言うべきか。

だが、それよりも彼女は知りたいことがある。連れ去られたリンゼの行方だ。

上体を勢いよく起こし、急いでベッドから足を投げ出して妹の元へ向かおうとする

が、鈍痛が頭に響く。後頭部を強く殴られた影響がまだ残っていた。
殴られた箇所を触ってみると、たんこぶができていた。脇腹にも痛みが走る。骨にヒビ――いや、もしかしたら折れているかもしれないと痛みで顔を顰めた。
「おっ、目が覚めたか」
左手側のドアから見慣れた青年が姿を現す。エルゼが打倒すべき相手である――土谷惟真だ。
彼の手には二人分のカップがあり、そこから湯気が出ている。温かい飲み物でも持ってきてくれたのだろう。
「アンタ、何でここに!?」
「そりゃ、俺が借りている部屋だからな。主である俺がいてもおかしくないだろ」
と言いつつ、エルゼにカップを手渡す。中身はコーヒーだ。「安心しろ、砂糖とミルクはたっぷりと入れてある」でも、エルゼは首を横に振って受け取らなかった。
惟真は拒否されても特に気にせず、ベッドの傍らにある小さなテーブルに彼女に渡そうとしたコーヒーカップを置く。
そして、泰然とした顔でコーヒーを啜る。「マスターの入れたコーヒーはやっぱり美味いな」わずかに微笑む。
「……妹のことか?」

沈痛な表情を浮かべて俯いているエルゼを見て、惟真は問いかけた。
彼の言葉にエルゼはバっと顔を上げる。少しだけ眉根を寄せている彼の表情が目に映った。近くにリンゼがいないことで察したのだろう。
エルゼは静かに首肯する。「……リンゼが攫われた」視線は再び自身の足元へ向けられた。「あたしが弱かったせいで……」姉としての責任感と守れなかった無力感が彼女を責め立てている。
「……そうか」
彼女のか弱い言葉を聞いて、惟真はそれだけに留めた。それから惟真は壁に寄りかかり、エルゼの次なる言葉を静かに待つ。黒緑の瞳は冷静に事を把握しようとしていた。
長い沈黙が二人の間を支配する。こうしている間にもリンゼの身に刻一刻と危機が迫っているのに、エルゼは何も行動できないでいた。
連れ去れた場所も分からなければ、自分一人で助け出せるかも分からない。大人たちは自分の話を聞いても信じてくれるかも不明。それどころか誰かを巻き込むことなんて、絶対にしたくない。
様々な感情が渦巻いて、彼女を迷わせる。そして、紡ぐべき言葉を喉元で留めてしまう。
「はぁ……仕方ないな、少し出かけくる」

エルゼが閉口して少し後、惟真が呆れ気味にため息を吐く。それからまだ熱いコーヒーを飲み干して、空になったカップをエルゼ用のカップの隣に置き、ドアに向かって歩き出した。

「待って！　……どこへ行くつもり？」

慌てて惟真を引き留めるエルゼ。まさかだと思うが、リンゼを助けに行くつもりだろうか。

だが、自分たちの間柄はそんなに親しいものでない。それどころか、エルゼの方は敵視と言っていいほど彼のことを快く思っていない節があるほどだ。実力は認めているが。

「野暮用を思い出した」ドアノブに手を掛けて、惟真は答える。「お前はそこで休んでいろ」冷たく鋭い語気でエルゼを突き放す。

「あ、あたしにも手伝わせてよ、その野暮用ってやつ……」

声は震え、言葉尻が萎んでいくがエルゼはそれでも振り絞って口を開いた。縋れるものなら縋りたい……誰か助けてと叫びたいという悲痛な思いが、今にも泣き出しそうなエルゼの表情を作る。

振り返って彼女を見つめる惟真の顔は険しかった。「駄目だ。そこで休め」身も心も凍てつくような冷たく淡々とした言葉。「お前が倒れたら、それこそ意味ないだろ」もは

や嘘は意味を為してない。
冷たく淡々として突き放すような物言いに、エルゼは鼻白む。けれど、目尻に涙を溜めながら気丈にも惟真を睨めつけて言う。
「リンゼはあたしの妹なのよ！　だから、助けに行きたいの！」
姉としての責任感だけがエルゼを支えていた。これ以上、肉親を失いたくない。
だから、リンゼを助けたい。苛まれたり、迷いを生んだりと自分を苦しめた思いが、今は原動力となっていた。
両者、睨み合う。やがて、惟真が諦めたかのように目を逸らしため息を吐いた。
「そこまで言うなら、分かった……さっさと準備しろ、妹を助けに行くぞ」
一方、男性たちに誘拐されたリンゼは石造りの薄暗い部屋の中、天井に繋がれた拘束器具により両手を縛られ、冷たい地べたに座り込み静かに待っていた。
待ち人はもちろん姉であるエルゼだ。彼女はきっと助けに来てくれるだろう。だが、あの怪我で果たして来れるのだろうか……。
――私が弱いせいだ。私がもっと強ければ、お姉ちゃんがあんな目に遭わなかった。
自責の念で押し潰されそうになる。独学で覚えた魔法を使うことができず、ただずっと姉が痛めつけられる光景を目に焼き付けていただけ。そんな自分の弱さを恥じた。
――お姉ちゃんは、いつも私が守ってくれた。だから、今度は私が助けなきゃいけな

い番なのに。

不意に悔し涙が零れた。非力な自分はどうして守られてばかりだろうと忸怩たる思いが込み上げてくる。

そんな彼女をよそに鉄製のドアが重々しく開かれた。部屋の中に入ってきたのは、先程自分たちを襲ってきた男性たちだ。

「ありゃ？　泣いてじゃん」

リンゼの涙に気付いたブロンドの髪の男性は、いつもと変わらぬ軽薄な笑みを浮かべて彼女の元へ近寄る。「安心しろよ、オレたちは何もしないさ」彼女の意を誤解しているようだが、何も手出ししないというのなら幾分か安心だ。「ボスは初物じゃなきゃ、駄目だからな」まだ幼いリンゼにはそれがどういう意味なのか分からなかった。

「姐さんのお墨付きだからな、丁重に扱わねえと」

茶髪の男性はニヤニヤとした気味の悪い笑顔で言う。ブロンド髪の男性も「何にもなけりゃヤれたんだけどなぁ」と調子よく笑った。

リンゼはその二人の会話を聞いて、自分の未来が良くないと察する。詳しい内容自体は理解できてないが、どうなるかという想像ができるほど彼女は聡明だ。だから、血の気が引いていく感覚に襲われた。

そんな中、一人の足音が響く。リンゼたちのいる部屋に近づいている様子だ。

誰だろうかという全員共通の疑問はドアの方へと向けられる。そこにはボサボサとした紺髪を逆立たせたショートヘアに深紅のレザージャケットが目を引く長身で筋肉質の男性が立っていた。

藤黄の瞳は猛禽類を思わせるような力強さがあり、腰に提げている剣は大剣と言って差し支えないほどの大きさで存在感を強く示している。

「何だぁ、ヴァンの旦那かよ。姐さんかと思ったぜ」

ブロンド髪の男性は紺髪の男性――ヴァンに視線を合わせた。紺髪の男性の方が背が高いため、自然と見上げる形になる。

「わりぃな、あのババアじゃなくて」

「それ、絶対姐さんの前で言うなよ？　マジギレされたら、洒落にならねえから」

「そん時は叩きのめすだけさ。それなら文句はねえだろ？」

茶髪の男性の警告を不敵な笑みで返すヴァンの瞳には、己の力量に対する絶対的な自信が宿っていた。

二人とは違う雰囲気を醸し出すヴァンにリンゼは別種の恐怖を感じる。今いるのは肉食獣そのものだからだろうか。ハッキリとした死への恐怖が腹の底から湧き上がってきていた。

「んで、そこのお嬢さんが今回のエサか？」

ヴァンはリンゼに気付き、剣が引っかからないよう器用に体を動かし、部屋の中へ入っていく。

武骨なブーツが鳴らす音は極めて不躾で、恐怖を駆り立てるようだった。

「ふーん、もうちっとデカくなったら、美味くなりそうな女だな」

リンゼの目の前へと歩み寄ると片膝をつき、彼女とできるだけ視線を合わせる。そして獲物を見定めるような目で彼女を観察した。

それに対してリンゼは体を強張らせ、小さく震わせる。今まで感じたことのないオーラに圧倒され、恐怖を感じ、覿面の男性に今すぐ食べられてしまうのではないかとさえ思ってしまっていた。

「んで、何でヴァンの旦那がここに？」

ヴァンの背に間の抜けた声で問いかけるブロンド髪の男性。茶髪の男性もどこか気の抜けた表情で見つめていた。

「あん？　テメェらが勝手しないように様子見てこいってババアに言われたんだよ」

肩越しに睥睨するヴァンに男性たちも顔を引きつらせ、体を強張らせてしまう。「さ、流石に手出ししないってですってば！　ボスが魔力が高い純白な女性じゃないと駄目なのは、分かっていますから！」言い返すブロンド髪の男性の声は上擦り、震えていて情けない。

「まぁ、俺は興味ねぇからどうでも良いけどな。んじゃ、帰るわ」

そう言って、ヴァンは立ち上がり踵を返して来た道を戻って行く。その背を三人は見つめているだけしかできなかった。

――怖いけど、あの二人とは違う。

リンゼは去り行くヴァンの背を見て思う。彼の瞳からは二人のような悪意ではなく、まさしく肉食獣と言っても相応しいほどに闘志を感じていた。純粋に戦うことが好きな人種なのだろう。そんな料簡を立てる。

それとは同時に彼の存在により、エルゼの命が危機に晒されることに気付く。

――どうか、お姉ちゃんが無事でありますように

今、リンゼができるとしたら、祈りを捧げることしかなかった。

第五章

その頃、惟真とリンゼは活気溢れる歓楽街を足早に歩いていた。

嬌声と独特の臭いが街を彩っている。嗅ぎ慣れない臭いにエルゼは顔を顰め、できるだけ傍目を向けないようにして惟真の背を追いかけていた。

人の欲望を直に見るのには、幼く純真すぎる。だから、偶然にも視界に入った瞬間、衝撃が大きすぎて彼女の中の壁がまた一つ壊れてしまった。

――リンゼを助けるためよ。しっかりしなさい、エルゼ・シルエスカ！

自分を何とか奮い立たせて、前だけを見つめる。惟真曰く、この道を通らなければ、リンゼを連れ去った人間たちのアジトには辿り着けないらしい。

何故、彼が知っているのかは不思議だが今はそれどころではない。現実と戦うので精一杯だ。

「おや？　惟真じゃないかぁ、こんな所で珍しいのぉ」

「よお、色ボケ爺さん。丁度アンタを探していたところだったんだよ」

惟真に話しかけてきた白髪に立派な白ヒゲを生やした老人。

身に着けているものはみずぼらしく、顔立ちもそれなりに年を重ねているように見え

る。

しかし、背筋は真っ直ぐと伸びていて肌ツヤも若々しいせいか、パッと見はそこまで老けているように見受けられない。

「儂を……遂にお主も覚悟を決めたのじゃな。よし、儂が」

「〝魔女の館（ウィッチーズ・パレス）〟は今日休みなのか？」

誘いをキッパリと遮り、惟真は自分の用件を話す。老人は特に気を悪くすることなく、「ふむ、〝魔女の館〟か」皺だらけの手でヒゲを撫でながら思案し、話を続けた。

「今日は休みじゃたなぁ……何でそんな所に？」

「ちょっと用事ができてな」

「ほほう、もしかしてそちらのお嬢さんに関することかな？」

老人は惟真の背から顔を出して様子を窺っていたエルゼに目を向ける。藍色の瞳は興味深そうに彼女を観察していた。

「ああ、そうだ」

「なら、ちょっと面を貸してもらおうかのぉ。そこのお嬢さんにも」

手招きされた二人は老人に連れられ、路地裏へと歩いて行く。道の傍らには欲望のままに重なり合う男女の姿が見えるが、それらを無視してただひたすらに老人を追いかける。

「この辺なら誰も聞いておらんじゃろ」
閑静な行き止まりに周囲を見渡して老人は薄汚れた木箱に腰掛けた。「さて、そのお嬢さんのことなんじゃが」静かに口を開いて話す。
「似たような子をついさっき見かけたんじゃ……髪は短かったが、顔立ちがよく似ておったわい」
「本当なの、お爺さん!?」
今にも掴みかかろうとするような勢いでエルゼは食いつく。手がかりが増えるにこしたことはない。
リンゼがいる場所がよりハッキリと分かれば、助けに行ける。僥倖が目の前に現れたのだから。
「ふむ、そうじゃな……金髪のチャラ男と茶髪のマッチョマンと一緒におったのじゃが……」
「リンゼだわ！　間違いない、あたしの妹よ！」
「そうだったじゃったんじゃな。なら、話が早いわい。あの男たちは〝魔女の館（ウィッチーズ・パレス）〟の従業員じゃ、その子もそこにいるじゃろう」
話を聞いて、エルゼは今すぐにでもその場所へ向かおうとするが、惟真に肩を掴まれ制される。「待て、もう少し聞きたいことがある」ここまで呼んでいた訳を察していたの

か、惟真は老人を見据えていた。
「それだけじゃないんだろ？」
惟真の言葉に老人はゆっくりと頷き、「最近耳にした話だがな……」とさらに続きを話す。
「どうやら店主はモンスターで若い女を食べないと体がもたないと言っておってな？それで寿命も近いし一日でも長く生きたいから、多くの人間の命を必要としているようじゃ」
あっさりとした老人の言葉だが、衝撃はあまりにも強すぎた。エルゼの頭の中は一気に焦りの色一色になてしまう。急がなければ、リンゼが危ない。
惟真に視線を送るが、彼は何事もなかったように落ち着いていた。
「そうか……ありがとう、爺さん。今度、美味い飯でも奢ってやるよ」
「飯より酒が良いわい。急いだ方が良いぞ」
「分かっているさ、ちょっと悪いな」
「へぇ!?」
瞬く間にエルゼは惟真に担ぎ上げられてしまう。突然のことで抗うこともできなかった。
抗議できたのは担ぎ上げられた後で、「ちょっと下ろしなさいよ！」羞恥で顔が赤く

なっていく。
　その声を聞き流して惟真は老人に話しかける。「じゃ、行ってくる」言葉は後ろに流れ、左右の壁を蹴っては上空へと飛び出していく。
「気を付けるんじゃぞぉ」
　老人の言葉がその場に残る頃には惟真たちの姿はなかった。
「ちょっと、ちょっと!?」
　家屋の屋根を次々に飛び移る惟真に猛抗議するエルゼ。担がれたと思ったら、いきなり屋根の上を疾走するものだから、驚くも当然だろう。
「あんな話を聞いたなら、急ぐのは当たり前だろ」
「だからって、こんな場所を走るって聞いてないわよ!」
「仕方ないだろ、あの中を走るよりもこっちの方が早いんだから」
　黒緑の疾風は瞬く間に目的の場所へと辿り着く。そして、その建物の屋根に足を着けた瞬間、地面が落ちる感覚に襲われる。
「しまった」
　踏み抜いたと自覚する頃には二人は惟真が作った穴に吸い込まれていく。惟真はエルゼに負担がないように素早く彼女を抱えて着地の体勢を作る。
　落ちる先にある木の床は二人の体重に落下のスピードが加わったことにより、悲鳴を

上げては撓むが何とか砕けることなく留めた。
「あっぶねぇ……」
エルゼを下ろし、天井を見上げる惟真。そこには大穴が空いており、星空を眺めることができる。
「ったく、何が〝こっちの方が早い〟よ。早くてもこんなんじゃ、命がいくつあっても足りないわよ！」
「すまん、これは俺も想定外だった」
悪態をつくエルゼを惟真はなだめる。そして周囲を見回して、自分たちがいる場所を確認。
二人がいる部屋は普段客室と使われている場所なのか、豪勢な調度品に丁寧に整えられたベッド、隅々まで掃除が行き届いている様子が見て取れる。
「今日は休みで良かったぜ……」
惟真は冷や汗をかいて呟いた。その呟きが耳に届いたエルゼは、一瞬何のことだろうかと考えたが、今まで見てきた光景をを思い出すと耳まで赤くし俯く。
そんな場面に飛び込んでしまったら——幼いエルゼでも想像したくないところだ。
本当に休みで良かったと彼と同じ様な気持ちを抱いてすらいる。
「とりあえず、部屋の外へ出るぞ」

ドアを慎重に開けて、周囲を警戒する惟真に続いてエルゼも退出。閑散とした館内を不気味に思いつつ、二人は歩を進める。

エントランスまで辿り着くと一人の男性が立っていた。紺色の髪を逆立てボサボサとしたショートヘアに深紅のレザージャケットが印象的な長身の男性――ヴァンだ。

「よぉ、久々だな惟真」

「お前か、ヴァン。またこんなところに雇われたのか？」

「まぁ、そんなところだ。俺の好きにして良いという契約だったからな」

「そうか……だが、お前と話している暇はない」

穏やかで落ち着いている二人の会話だが、異様な緊張が走る。これから一歩でも踏み出せば、激しい戦いが始まる――そんな予感がエルゼの中にあった。

重々しく息詰まる空気で気死しそうだがエルゼは辛うじて口を開く。

「知り合いなの？」

「ああ、ちょっと前に一緒に仕事をした仲だ」

彼女に一瞥もしないまま惟真は答える。表情は異常に硬い。「それでこの子の妹を探しているんだが、知っているか？」そのままヴァンへと問いかけた。

「妹……妹かどうか知らねえが、ちんちくりんなら地下にいたな」

質問に少し逡巡するヴァンだったが、ハッキリと返答する。「さっさと行った方が良

いぞ。雇い主は飢えているからな」地下への入り口を指し示した。
ヴァンの言葉を聞いて惟真はエルゼに目配せをして、先に行くように指示を出す。
エルゼは後ろ髪を引かれる思いもありつつ、今の自分では足手まといになるだけだと自覚している故に、大急ぎで地下へと駆け出していく。
彼女の姿が見えなくなった後、惟真はおもむろに言う。いつでも動けるように体を撓ませながら。
「良いのか？　依頼人に怒られるぞ？」
その言葉にヴァンはにやりと獰猛な笑みで返す。腰に提げている剣を鞘ごと傍らに放り投げて。
「知るかよ。俺の好きにして良いって言うから好きにしたまでだ」
「相変わらずだな」
「変わらねえのはテメェもだろうが……始めようぜ、どっちが速いか競争だ！」
黒緑と深紅の弾丸が同時に飛び出し、交差する。そして――。
惟真とヴァンの競争が始まった頃、エルゼは地下エリアまで何とか辿り着けた。人がいないことを不審に思うが、今はそれどころではない。
疑問を振り払って先に進む。通路に出る前に二人の男性が待ち構えていた――ブロンドの髪の男性と茶髪の男性、因縁の相手とも呼べる者たち。

「アンタたち……妹を返してもらうわよ！」
不意打ちがあったとはいえ、一度は敗北を喫した相手。エルゼは臆することなく、拳を顔面の前に掲げて臨戦態勢に入る。
この二人を倒さなければ、リンゼの元へ辿り着くことはできない。だからこそ、迷いはない。
「ふん、いくらゴリラ女でもオレら二人はキツイんじゃね？」
「そうだな、力の差でも圧倒的に不利だぞ」
数的も力も有利だと踏んで、男性たちは余裕の笑みを浮かべる。さらには茶髪の男性の手には樫の木で作られた棍棒が握られていた。彼の力とあの硬さが合わされば……エルゼが体験した通りになるだろう。
「うっさいわね！　数でしか女の子に勝てないなんて恥ずかしいと思わないの?!」
言葉を言い終わるか終わらないかの内に、エルゼは地面を強く蹴り茶髪の男性の方へ飛び込んでいく。
彼女の行動に気付いた男性は棍棒を振り上げる。だが、彼の動きはあまりにも緩慢すぎた。
もう既にエルゼは懐に潜り込み拳を突き出している。そして、魔法を詠唱していた。
「ブースト！」

茶髪の男性の屈強な体に拳を打ち込むと同時に、先程詠唱した魔法の効果によりさらにインパクトを強める。彼女の全体重と魔法による筋力強化によって生み出される威力は並大抵のものでない。

為す術もなく受けた男性は手に持っていた棍棒を手放し、腹部を押さえながら蹈鞴を踏んで後退する。

内臓を潰されたのか、下がった先で血を吐き出して脂汗を流していた。やがて痛みに耐えきれずに失神し、自ら作った血の海へと倒れ込む。

そんな様子をエルゼはただ無表情で見ているだけ。彼女には彼にかける慈悲など持ち合わせていなかった。

強いて言えば先程のお返しといったところだろう。もはや倒すべき障害以外何ものでもないのだから。

「つで、一対一になったけど?」

茶髪の男性が倒れるのを見届けると、エルゼはブロンドの髪の男性を睥睨する。体はいつでも行動できるように撓ませていた。

――正直、アイツと比べたら大したことがない。アイツは一発も当てさせてくれなかったからね。

失神している屈強な男性に一瞥し、眼前のブロンド髪の男性も観察して思い起こす。

この二人は確かに素のパワーだったら、エルゼより何倍も上だろう。特にエルゼの傍らで地に伏している男性は、惟真よりも力があると言っても過言でない。

しかし、圧倒的に速さが足りていないのだ。いくら力があろうとも技を当てる速さがなければ、意味を為さない。だから、エルゼとの実力差はかなりあるのだ。

「へへっ、ついさっきは手加減してたんだよ！　おらぁ！」

引きつった笑いからブロンドの髪の男性は鬼気迫る表情で殴りかかる。だが、力んでいるせいか、腕の振りが大振りとなりエルゼは余裕で回避する。

その後もエルゼは必殺の一撃を見舞うタイミングを窺いながら、落ち着いて男性のパンチを次々に躱していく。

男性の拳が大きく空を切った瞬間、エルゼは疾走して脇腹に右拳を叩き込む。「ブースト！」もう一度魔法を使用し、一撃を重くする。

骨が砕かれたり、内臓が潰れる感触が彼女の拳に伝わるもののエルゼはさらに押し込んだ。

ブロンドの髪の男性も茶髪の男性と同じように血を吐いて倒れ込む。

男性の血をそのまま浴びたエルゼは苦虫を噛み潰したかのような表情を浮かべるが、背に腹は代えられないと分かっているため、我慢することにした。

そして、リンゼがいる部屋を探しに通路へと駆け出す。――男性たちからどこにリン

ゼがいる部屋の鍵を受け取っていないどころか彼女がどこにいるのかさえ尋ねていないまま。

薄暗い部屋の中でリンゼは、ただひたすらに祈っていた。――願わくば、もう一度姉と会えますように。

すると、鉄でできた扉が歪み始める。魔法の詠唱をしていないのに、鉄製のドアが歪むの尋常ではない。

恐怖がリンゼの体を小刻みに震わす。もしかしたら、彼らが言っていたボスがやって来て食べられてしまうという最悪の事態を想像して。

けれど、部屋に光が差し込んだ瞬間、彼女は安堵した。目の前に現れたのは、エルゼ（ヒーロー）だったからだ。

「お姉ちゃん！」

「リンゼ！」

身動きのできないリンゼは可能な範囲で姉に近づこうとする。エルゼもリンゼの方へと駆け寄り、彼女を抱きしめた。「ごめんね、こんな怖い思いをさせちゃって……」情けなく震えているエルゼの声が耳朶を打つ。

「ううん、私は大丈夫だよ。お姉ちゃんこそ、大丈夫なの？」

「あたしも平気よ」

「でも、血が……」
「ああ、これ？　これはあたしの血じゃないから」
　返り血を浴びたまま放置していた為、髪や服があちらこちら黒く変色し、本来の色が塗り潰されていた。
　それに気付いたリンゼだが、エルゼの言葉を聞いてひとまずは安心すると同時に、誰の血なのかという疑問が沸き上がる。
「じゃあ、誰の……？」
　恐る恐る尋ねてみると「これはあのいけ好かない金髪男のよ」あっさりと返答するエルゼ。
「その人は大丈夫なの？」
「さあ？　あんな奴の心配をしたって仕方ないんじゃない？」
　淡泊な姉の意見にリンゼは困惑するばかり。気の強い姉のことだから、そう易々と同情するわけもないのは分かるのだが、いくら何でもそれは酷すぎるのではないかと。
「その人たちも助けに行こうよ」
「何でよ、リンゼを連れ去った奴らなのよ？　助ける必要なんてないじゃない」
「それでも傷付いて困っている人は放っておけない」
　リンゼは真っ直ぐな瞳でエルゼを見つめる。そこには気弱な彼女からは想像もでき

ない頑なな意志を宿した光が灯っていた。
いくら自分たちに害を為した相手だとは言え、流石に血まで吐いているぐらいの怪我をしているなら手当てぐらいはしたい。
彼女の強い意志にリンゼは諦めたかのようなため息を吐いた後、「分かったわ、リンゼがそう言うなら」観念の意を伝える。
そして、リンゼを拘束している器具を破壊して二人は男性たちが倒れている所まで歩いて行く。
彼女たちが到着していた時には、そこは血の海しかなく誰一人もいなかった。
「どうなっているの……？」
リンゼは大きく目を見開いて動揺するが、エルゼは「きっと目を覚まして、どっか行ったんじゃない？」と結論付ける。
だが、リンゼにはそう思えなかった。
血まで吐くということは相当重傷だということを示している。だから、すぐに動けるはずがないと思うが……。
今の彼女たちに二人の行方を知るよしもない。

第六章

エルゼたちが再会していた頃、惟真はヴァンと激戦を繰り広げていた。

ヴァンの右足が惟真の眼前を通り過ぎ、空気が灼ける匂いを感じる。間隙を縫って惟真は詰め寄り、次々と拳を突き出していく。

躱すのが不可能だと感じたのかヴァンは捌くことだけに専念。一発もまともには当てさせない。

惟真は左膝を蹴り上げるが、これも読まれていたのか受け止められる。それでも構わず、パンチと膝蹴りを混ぜてヴァンを攻め立てていく。

これらも全て避けられたり、捌かれたりと決定的な一打を与えることができずにいた。

惟真の足が一瞬だけ止まる。その一瞬間だけでヴァンは足を折りたたんで抱え込み、惟真の鳩尾目掛けて腰を前へと出して足を突き出した。

まともに喰らうわけにはいかないと判断した惟真は、咄嗟にバックステップを取ることで空を切らせる。

下がった分だけ距離を縮めようとするが、それをヴァンの左足が阻むように鋭利に円

を描いて襲いかかる。――狙いは胴だ。
避けることはせず、惟真は右腕一本で受ける。並の者ならば右腕ごと壊している蹴りを右腕は何事もなく受け止めた。
普通だったら、驚愕するところだがヴァンにはそれはない。そのぐらい当然だという想定があるからだ。もちろん、惟真もヴァンの蹴りには驚きなどしない。
お返しと言わんばかりに惟真も左足で蹴る。下段と見せかけて内から回り、ヴァンの上段を狙う。
意識が一瞬でも下へ向いていたら、確実に入っていただろう。だが、それもヴァンに防がれた。
「ったく、性が悪いぜ」
惟真の蹴りを受け止めたヴァンは辟易するどころか不敵な笑みさえ浮かべている。
素早く蹴り足を戻した惟真は距離を取って返す。いつでも飛び出せるようにしながら。
「お前と違って、頭使わないと戦えないんだよ」
「俺だって、頭使っているけどな」
「駆け引きなんて言葉、お前の辞書にあるのか？」
「ねえな、俺にあるのは相手を叩き潰すことだけだ」

互いの言葉は後ろへ流れる。同時に駛走するが、先に拳を伸ばしたのは惟真だ。
しかし、ヴァンにダッキングで躱される。そしてヴァンからも右拳が飛んでくるが、内受けで軌道を逸らしてやり過ごした。
そして速やかにヴァンの左手側に体を捌き、左足を抱え込んでは右足を軸にして彼の胴へと蹴り込むでいく。
ヴァンはバックステップを行いつつ左手で流すように捌くことで直撃を免れた。
再び距離が空いて、一瞬間静寂が訪れる。
が、間に入るかように風を切る音が二人の耳元に届いた。
音を頼りに惟真とヴァンは次々と迫り来る得体の知れないものを躱していく。彼らがいた場所は切り刻まれ、粉塵を上げる。
出処を探る惟真は避けながら辺りを見渡した。すると、エントランスの奥から両手を蠢くように扱いながら女性が現れる。
年を重ねているようだが艶美な笑みを浮かべ、気品溢れる佇まいも合わさって妖艶な美しさが際立つ金髪の女性。真っ赤なドレスを身に纏い、その上に黒いカーディガンを羽織っては、ドレスと同じぐらい鮮やかな赤いヒールを履きこなしている。
「おい、ババア！　邪魔すんじゃねえよ！」
ヴァンは彼女の手元から織りなす不可視な攻撃を躱しながら怒鳴りつける。「契約と

違うだろ！」手放した愛剣に近づこうとするが、中々近づけない。
「事情が変わったから、契約は破棄よ。あの御方はもう……」
一瞬だけ悲しみの色を琥珀の双眸に映す。「だから、あなたにも死んでもらうことにしたわ。Ｍｒ．ヴァン」すぐさま殺意を宿した。
「へっ、上等じゃねえか！　叩き潰してやるぜ！」
強気な姿勢を崩さないヴァン。藤黄色の瞳は炯々と輝き、さらなる闘志の昂りを表している。そして少しづつ大剣の方へ近づいていた。
「そう……なら、そこの男と一緒に逝きなさい！」
女性はさらに両手を激しく動かす。風を切る音が不規則ながらも速くなっていく。
「くそったれっ！」
避けるだけでは対処しきれないと決断した惟真は速やかに腰に収めてあるトンファーを抜き、次々と迫り来る不可視の攻撃を弾く。
金属同士がぶつかり合ったことを示す甲高い音と激しく散る火花。
女性が操る不可思議な物体は鋼糸だと知る。
「とんでもないものを扱いやがる！」
これには惟真も呻きに近い声を出すしかない。使う者が少ないとされる鋼糸を易々と扱う女性は相当の手練れだと認識したからだ。

「ふふ、イーシェンの里で手に入れた技術よ……バラバラに切り刻んであげるわ！」
「それは流石に御免だ。まだやり残したことがあるからな」
と言いつつ、惟真は女性に接近していく。飛来する鋼糸を弾いていくが、それだけに集中力を割くわけにはいかず、体のあちらこちらを撫でられては血が溢れる。
それでも臆せず飛び込んでいく惟真。だが、女性に一撃を入れようとした瞬間、咄嗟に距離を離す。
彼のいたところからほど近い場所にある壁の装飾が細かく切り刻まれ、床は深く傷を付けられては絨毯の繊維が舞い上がった。
「あら、やるわね」
女性は額に汗を浮かべながらも口元は余裕を表していた。手元はまだ妖しく蠢いている。
彼女が織りなす鋼の波に惟真は小さく舌打ちしながらもこれをトンファーで防いでいく。彼の表情はやや焦りの色が帯びている。そのせいか度々肉を削がれ、血を出していた。
着実に惟真を追い込む女性だが、数秒間だけ彼に集中していたのが仇となる。
猛烈な勢いで大剣を持った深紅の弾丸が彼女へと迫り来たのだ。女性は驚愕し、それを止めようと慌てて左手で阻む。

そのまま直進すれば、ヴァンの肉体はたちまち分解され人の形を成すことはできないだろう。

だが、ヴァンは止まることはせず左手を伸ばす。直後、彼は体は切り離され――ることはなかった。

代わりに耳を劈くような女性の悲鳴が部屋一帯に響く。注視すると女性の左腕が肉どころか神経まで引き裂かれているだろうと言わんばりの深い裂傷が生まれ、明らかに使い物にならなくなっていた。

「……糸剥がしか、お前どこで覚えた？」

惟真にヴァンへ静かに問いかける。ヴァンは左手の指を軽く動かしながら「それは企業秘密だ」と返し、「久々にやったもんだが、上手くいくもんだな」独りごちる。

「さてと、アンタ……まだやるのか？」

それ以上は問いただす気がない惟真は女性の方へと振り向く。双眸は激しい敵意もなければ殺意もない。

「当然よ……あの御方の為に私はこの身を捧げようと決めて……だから、あなたたちも道連れに」

「面白くねえ冗談だな、耳障りだ」

一瞬の出来事だった。女性が右手を動かすよりも先にヴァンが右手で持っている剣

を振るい、女性の首を切り落とす。鈍い音がした後、先程まで惟真たちを苦しめた女性の体は力を失い、膝から崩れ落ちる。鮮やかな赤が周辺を染め上げていく。――実にあっけない最期だった。

「おい、殺すことはなかっただろう！」

珍しく声を荒げる惟真を尻目にヴァンは興味なさそうに女性を見つめる。「ったく、いきなりつまらねえ話しやがって……興が醒めちまっただろうが」先程と打って変わって辟易した様子で呟く。

「お前なぁ……いい加減にしろよ」

「あん？　アイツの気持ち悪い信念に付き合いたくねえんだ。あんなバケモンに心酔する方がどうかしている」

「……化け物？」

怒る気持ちが消え失せたわけではないが、惟真はヴァンが発した単語が引っかかり、眉を顰める。

「お前も聞いたことあるだろう？　この娼館の主がバケモンだって噂」

「ああ、あるな」

「ありゃ、マジだぜ……しかも、ここにいた娼婦全員を食いやがった」

惟真はヴァンの話に鼻白む。だが、腑に落ちるところがあり、「だから、ここが妙に静

かだったのか」と納得した。
「ああ、まぁお前の連れも食われなきゃ良いけどな」
　その言葉に惟真は再び焦る。彼女たちの身が危ないと今さら気付く自分に苛立って舌打ちしながら、彼の傍らを通り過ぎようとした――が、その必要はなかった。
「何これ、どんだけ暴れたのよ？」
「つ、土谷さんたちのが戦った後、なのかな？」
　銀髪によく似た顔立ちの少女たち――シルエスカ姉妹が無事な姿でエントランスへやって来る。その様子に惟真はほっとため息を吐いて、胸を撫で下ろした。
「よく無事……って、お前。その血どうしたんだよ？」
「ああ、これ？　金髪の吐いたのをそのまま浴びちゃったのよ。アンタこそ、傷だらけじゃない」
「まあな。少し手こずった」
　惟真とエルゼが言葉を交わしている間、リンゼもヴァンへ話しかける。
「あ、あの、さっきぶりです？」
「テメェは確か地下にいた奴だな。隣のちんちくりんはお前の姉ちゃんか妹か？」
「は、はい……私の、お姉ちゃんです」
「ふーん、顔よく似てんな」

「よく……言われます」

程よく話せたところでこの場から離れようとした四人。しかし、それを許さない存在がまだいた。

エントランス内が揺れる。まるで地震が来たかのように。同時に獣の咆哮と呼べるものが四人の耳元へと入ってくる。

咆哮が徐々に近くなっていると感じた時には、巨大で筋骨隆々の右腕がエントランスの壁を突き破り、次々と壁を壊していき姿を現した。

灰色の体毛、鋭く研ぎ澄まされた爪、布切れや血がこびりついた牙と人の形に近い異形の生物が二本の足を地に着けている。目は血走り焦点が合っていないことから、正気は失われている様子が見て取れる。

彼らは直感した――その存在こそ、〝魔女の館（ウィッチーズ・パレス）〟の主だと。

ワーウルフは高らかに吠える。そして彼らに襲いかかった。

第七章

惟真はエルゼを、ヴァンはリンゼを抱えて飛び退いた。ワーウルフの爪が空振るだけ凄まじい風圧が押し寄せてくる。

誰もが思っただろう――あの爪に当たれば、肉を抉られるどころか骨まで砕かれると。

「ちとばかし面白れぇのが飛び込んできたな」

「そうか？　俺には最悪な魔物にしか見えないぞ」

二人とも少女たちを下ろし、彼女たちを守るかのように前へと出て、ワーウルフと対面する。

相変わらず強気で不敵な笑みを絶やさないヴァンと彼の言葉に困惑する惟真。二人とも体はいつでも動き出せる状態だ。

「あたしも前へ出るわ！　リンゼ、援護お願い！」

「う、うん……」

エルゼも守られてばかりではないと前へ出ようとする。だが、リンゼは倦んだ様子で返事がぎこちない。

「なぁに、大丈夫よ。アイツらがいて、リンゼもいるんだから」
彼女の心中を察したのかエルゼはヴァンに負けず劣らずの不敵な笑みで妹を元気づけようとする。
リンゼもこの時ばかりは素直に頷き、「分かった。後ろは任せて」と力強く言った。
エルゼはその様子に満足したように頷いては、振り返り背後にいるワーウルフを睨みつける。
ワーウルフは見境なく暴れていており、誰もいないところを荒らしていた。これが主を務めていたのだから、驚く。けれど、その驚愕は忘れることにした。
そして前衛の三人は一斉に地面を強く蹴り出し、ワーウルフに向かって突進する。
「氷よ絡め。氷結の呪縛、アイスバインド」
彼らを援護するようにリンゼは魔法を詠唱し、ワーウルフの足元を凍らせていく。人狼の力を見るに対して拘束できるわけではないが、それでも速さが自慢の前衛組に攻撃する時間を与えるには十分だろう。
その前衛組の一番手は惟真だ。彼は跳躍して頭上からトンファーを振り下ろした。その速さにワーウルフは追い付けない。
だが、直撃しても微動だにはしなかった。蠅を払うかのように軽く振るわれた左手は人の域などを優に超えた速さで惟真へと迫る。そしていとも容易く惟真を捉えて振り

払った。

惟真は為す術もなく吹き飛ばされ、そのまま壁に激突する。壁は衝突の凄まじさを物語るようにヒビが入り、陥没していた。惟真は地面に伏せてた後、気を失ったのか動かなくなってしまった。

そんな光景を目もくれずヴァンは左手にある鋼糸を操ってワーウルフの右腕を断ち切ろうと試みる。だが、すぐに手放した。

ワーウルフの尋常ではない筋力により糸は剥がされ、あちらこちらへと暴れ回る。幸い誰も鋼糸の犠牲にはならなかったが、もしヴァンの反応が一瞬でも遅れていたら鋼糸の持ち主よりも酷い結果が待ち受けていただろう。

想像以上の力に驚くこともなければ、臆することもなくヴァンは大剣を両手に持ち、ワーウルフの懐へと飛び込んでいく。これもまたワーウルフが対応できない速さで突くが手応えは途中で止まった。糸を強引に剥がしたほどの強靭な筋肉が剣を食い止めたからだ。

すぐさま剣を手放し、ワーウルフの左手をバックステップで躱した後に再び疾駆して、その勢いを利用して柄頭を掌底で押し込む。今度は深くまで突き刺さり、流石のワーウルフも痛みに苦しんでは吐血した。

しかし、逆上したワーウルフの右拳はもはや人間の目では映らないほどの神速で、

ヴァンの体を確実に捉えては彼を突き飛ばす。
ヴァンもまた異常なスピードのまま木製のカウンターと衝突した。粉々になった木片が辺り一面に降り注ぐ。
彼らに続いてエルゼもブーストを使って飛び込んでいくが、氷の呪縛が解けた人狼に文字通り一蹴されて木でできた棚にぶつかり、衝撃で倒れた棚の下敷きに。
瞬く間に惟真、ヴァン、エルゼの三人は蹴散らされ、残すはリンゼのみ。
だが、彼女は逃げも隠れもせず、今できることを懸命に考えた。そして、行動に移す。
「炎よ来たれ！　紅蓮の炎槍、ファイアスピア！」
炎の槍が全てを焼き尽くさんと燃え盛り、ワーウルフへと飛来。このまま直撃すると思われたが、リンゼは驚くべき光景を目にする。
何とワーウルフはあろうことか己の蹴りで作り上げた暴風で炎を掻き消したのだ。人知を超えた生物らしいと言えばらしいのだが、もはやそれすらも表現するのは的確ではないだろう。
それでもめげずに「炎よ来たれ！　赤き速弾、ファイアアロー！」と詠唱して抵抗するリンゼ。
複数の炎矢は高速で打ち出され、ワーウルフに襲いかかる。
だが、これもワーウルフがパンチや蹴りで生み出す風の壁により打ち消されてしま

う。ただ一つ先程と様子が違った。
ワーウルフの息は上がり、足取りも覚束ない上に焦点もさらに乱れており、何を見ているのか定かではない。
そして何かを求めるように右手を伸ばし、リンゼへと歩み寄る。「フィリア……愛しのフィリア……」譫言を口走っていた。
リンゼは彼の変調の原因を見極めようと凝視し、気付いてしまった。彼の牙にこびりついている布切れは、彼女たちを襲撃していた男性たちが着ていたものだと。
驚愕するが、譫言を発し続けながら近づくワーウルフを前にすぐさま現実に戻り、彼を見据える。
「私は、フィリアじゃありません」
静かに、けれど芯の強い言葉が響く。すると、ワーウルフは動きを止めてしまった。
「嘘だ……その魔力の高さはフィリアしかいない……だって、匂いが」現実と虚構の狭間で何を見ているのか、リンゼには分からない。けれど、何かしらの幻想を見続けていることは察した。
「私の名前はリンゼ・シルエスカです。フィリアという人ではありませんし、その方は知りません」
淡々と事実だけを述べていく。そんな事実を受け入れられるほど、ワーウルフが正気

ではないのは重々承知している。それでも彼女は否定するしかなかった。
「嘘だ、嘘だ、嘘だ、嘘だ、嘘だ！　キミはフィリアだ！　フィリアじゃなきゃ、誰なんだ!?」
「嘘じゃありません！　私はリンゼ・シルエスカという名前です！　あなたが愛したフィリアさんじゃないんです！」
「ああ、その強さは……やっぱりキミはフィリアなんだね。ようやく会えた……これからはずっと一緒に」
会話が成立しない。幻想に飲まれたワーウルフには、言葉はもう届かなかった。
彼が大口を開き、リンゼを頭から噛み砕こうとする。リンゼは目も見開いて、微動だにしない。
何故なら――
「ウチの妹に手を出してんじゃないわよ！　このド変態!!」
ワーウルフの背後からエルゼの右足が側頭部へと当たり、ブーストを用いて蹴り飛ばした。
先程、惟真の打撃を受けても平然としていたワーウルフだが、その面影はなく軽々と壁に打ちつけられる。しかし、リカバリーは早く、すぐに立ち上がった。
「まだあれで立つの!?」

「お姉ちゃん、来るよ！」
姉妹は言葉にもなっていない絶叫が迸らせながら疾走するワーウルフを何とか躱し、体勢を整える。
「あたしが引き付けておくから、リンゼ魔法をお願い！」
「うん！」
そう言ってエルゼはワーウルフに向かって駆走し、もう一度ブーストを用いて右拳を脇腹に叩きつける。
これまた効いたのか、ワーウルフは再び口から血を吐き出した。だが、逃すまいと爪を立て、エルゼに刺突しようと左手を振り下ろした。
確実に逃げられない速度で、リンゼの魔法も間に合わない。エルゼは死を覚悟した。
だが、彼女の耳に届いたのは、金属がぶつかった時に鳴る甲高い音。
目の前では鋭利で硬い物体がいくつか飛散した。
エルゼの眼前に現れたのは惟真だ。トンファーで爪を叩き折り、彼女の窮地を救ったのだ。
そしてエルゼは惟真に抱えられて後退する。と同タイミングで、リンゼが放った炎の槍が疾駆した。
まだ力は残っていたのか、またしても炎の槍は暴風壁により消失。

それを見計らったかのように深紅の弾丸がワーウルフが作り出した強風の壁をものともせずに突っ切る。

「そろそろ返してもらうぜ。テメェの血で錆びつかせる程、安いモンじゃねぇんだ」

ヴァンは口の端をを獰猛に吊り上げる。傍から見れば、飢えた野獣のそのものように。

柄を両手で握りしめ、剣を右手側に捻り傷口をさらに開く。そして、右足の脚力のみでワーウルフを蹴り飛ばして引き抜いた。

刀身は血に濡れ、本来の色を失っている。大きく振るい落として、銀色が蘇った。

「まだやるみたいだな」

頭に強烈な打撃をもらい、爪は折られ、腹部の傷が広がっても尚ワーウルフは立ち上がる。

言葉の羅列は意味を成さず、目はもはやどこを見ているのかさえ分からない状態だ。

それでもワーウルフは地面を強く蹴り出して、ヴァンへと突撃する。だが、動きがあまりにも鈍重すぎた。

銀色が一筋流れるとヴァンを潰そうとした左腕が宙を舞う。

地に落ちる前に惟真とエルゼが飛び出し、各々最大の力を込めた拳をワーウルフの胴体へと叩き込んだ。

蹈鞴を踏んで後退るワーウルフに追い討ちをかけるようにリンゼが炎の槍をもう一度放つ。

着弾し、ワーウルフは燃え盛る。肉が焼ける独特の臭いが部屋一帯へと瞬く間に充満。

それでもワーウルフはリンゼに向かって右手を伸ばす。けれど、左腕が地面に着いた直後、彼は頽れた。

何が彼をあそこまで狂わせたのかは、四人に知る術はない。ただその最期を見届けるしかなかった。

終章

「――っで、ワーウルフの炎が館中に広がちゃったから、慌てて脱出したのよ」
とユミナにその時のことを語り尽くしたエルゼ。非常に苦労したと顔に出ている。
「それで土谷さんという方やヴァンさんという方は、いずこに？」
話の顛末をしっかり聞きたいユミナは、エルゼたちに質問を投げかけてはぬるくなった紅茶を啜る。
「それが……館を出て、手当てをした後に別れたきりで……」
「そうですか……」
「アイツらの行方もそうだけど、あの館の主も謎だらけよ」
「それについては、仮説がいくつかあります」
ユミナの泰然とした口調に目を丸くする二人。「何か分かったんですか？」リンゼが興味津々に尋ねる。
その問いにユミナは「ええ、あくまで推測ですけどね」と付け加えて話す。
「まず、リンゼさんが狙われた理由は恐らく魔法の適正数や魔力が優れていて、なおかつ生娘だったからだと思います」

「ああ、そう言えば、そうじゃないと食べられないって聞いたわね」
エルゼは思い出したかのように言う。実際、自分は見聞きしていたわけではないので、実感がそこまで湧いていないが。
彼女の様子を見て、理解度を確認しながらユミナはさらに話を進めた。
「古来より純白な女性は神性を帯びているとされており、さらには魔力が高ければ重宝していたとも言われたほどです」
「確かに神話系の話では、そのように女性が扱われることが多いですね」
「ええ、だから純白で魔力の高い女性を贄にして武器を作った逸話も生まれるんです」
「ってことは、リンゼを食べれば、そいつの体が強化されるってこと？」
「大まかな解釈としてはそれで良いと思います。恐らくリンゼさんを食べて、魔力を補給していたのでしょう」
想像するだけで身震いをしてしまう話だが、二人は不思議と恐怖を感じなかった。むしろ疑問に思っていたことが解決されたことにより、モヤモヤしていたものが晴れてさえいる。
「狂った理由はハッキリとは分かりませんが、かなり長く生きてきた影響があるのでしょう。少なくとも私たちよりも長く生きていそうですから」
「だから、見境なく食い散らかしたわけ？」

エルゼのストレートな発言にユミナは苦笑しつつも「ええ、そうだと思います」と肯定した。

「もう最期は愛していた人の幻想でも追いかけないと持たなかったのでしょうね」

空になったティーカップの底を見つめ、ユミナはどこか悲しげに呟く。リンゼも同情しているのか憂いの表情を浮かべた。

話が一段落した時に、ドアが開くと同時に入店を知らせる鈴が鳴る。一同は出入り口に注目した。

黒髪を一つに結び、黒い瞳に彼女たちよりかは幾分か大人びた顔立ち、薄紅色の着物と腰に差した二振りの刀が目を引く少女――九重八重（ここのえやえ）だと認める。

「八重さん、こちらです」

ユミナは八重に呼びかけ手招きをする。それに気付いた八重は真っ直ぐに彼女たちが座る席に歩み寄った。

「いや、用事が思ったより長引いてしまってすまぬでござる」

「別にいいわよ、そんぐらい。それよりも八重が来たことだし、さっさと行くわよ」

「ええ……八重さん来たばかりだから、少し休憩してからの方がいいんじゃない？」

「リンゼ殿、心配には及ばないでござるよ。拙者は大丈夫でござるから」

「なら、行きましょう。私たちも少しでも腕を磨かなくてはいけませんから」

こうして集まった四人は会計を済ませて、店の外へ出て行った。
彼女たちは街から少し離れた森の中にいた。己の腕を磨くために冒険者ギルドへ赴き、クエストを受注したのだ。
根っからの武人である八重や好戦的なエルゼだけでなく、リンゼもユミナも鍛錬をしなければならないと常々思い、こうして集まって修行している時がある。
冒険者たる者、いつまでも他人に守られ続けては格好がつかない。だからこそ、こうして修行に出向くのだ。
「今回はリザードマンを十体狩ればいいのよね？」
「うん、そうだよ。でも、数が少ないからって油断しちゃダメだよ、お姉ちゃん」
「分かっているわよ！　増援があるかもしれないんでしょ」
リンゼの忠告に対して、エルゼは耳にタコができるぐらい聞いたと言わんばかりに返す。
彼女の言葉に八重は頷き、言葉を紡いだ。
「そうでござるな。下手をすれば十体どころか二十体も狩らねばならぬかもしれないでござる」
「あまり想像したくないことですが、想定するに越したことはないでしょう」
最年少ながらユミナは落ち着いた様子で辺りを見渡す。彼女の手には弓が握られ、腰

には矢筒があった。
程なくして、近くの木陰が動いた。それを察知したユミナが「八重さん、エルゼさん」と前衛二人に呼びかける。
二人は呼びかけに応じ、エルゼは拳を眼前に構え、八重は左手を鯉口に添えては切って抜刀できるように準備する。
木陰から飛び出して来たのは、彼女たちが探し求めていたリザードマンだ。
八重が先行して、刀を抜き放つ。銀色が一つ流れるとリザードマンの頭と胴体は切り離され、頭は放物線を描いて八重の背後の木にぶつかって落ち、体は力を失い膝から崩れる。
それだけは終わらない。八重は振り返り周囲を見回す。もう既に何体かのリザードマンが出現しており、エルゼたちが交戦していた。
「炎よ来たれ！　赤き速弾、ファイアアロー！」
「雷よ来たれ。白蓮の雷槍、サンダースピア」
リンゼは炎の矢を、ユミナは雷の槍を覿面にいるリザードマンたちへ放つ。直撃したリザードマンは燃え盛ったり、貫かれて感電したりと致命傷を負う。
難を逃れてもエルゼのブーストによる筋力強化が行われた鉄拳で、頭の骨を砕かれてしまい、血と脳漿を撒き散らして頽れる。

さらには八重の鋭い斬撃による嵐で為す術もなく次々と首を切り落とされていく。
優に十体を超えただろうか――それでもリザードマンたちの進行は留まることを知らない。
「ったく、ホント、ツイてないわね」
「やっぱり想像した通りでしたね……少し厳しいですね」
少女たちは互いの背中を預け合うように中央へ集まる。思った以上の数が出てきたが、対処できないことはない。
だが、ユミナの言う通り、数が多すぎて少しばかり分が悪いのも確か。
「でも……これを切り抜けられなければ、冒険者の名が廃ります、よね？」
「左様でござるな。これぐらいは切り抜けなければ、笑われるでござる」
八重の言葉は後ろへと流れて行った。再び先陣を切って、彼女は刀を振るう。
眼前のリザードマンは胴を横一文字に斬られ、内臓と血を辺り一帯にばら撒いていく。
仲間の一体が八重の背後から襲いかかるが、後頭部から幾本かの矢が額にまで突き刺さり、力を失って横へと体が流れる。
「かたじけない」
「どういたしまして。八重さん、そのまま前に出てください」

「承知したでござる」
ユミナの指示に従い、八重は薄紅色の弾丸となりて、リザードマンたちを絶えまなく斬りつけていく。
彼女の背後を弓矢と魔法を駆使してユミナが守る。たちまち数は減っていく一方だ。
対して、エルゼやリンゼも負けじと息の合ったコンビネーションを見せつける。
リンゼが放った炎の槍や矢でリザードマンたちの注意を引きつけ、エルゼがブーストを使った打撃で屠っていた。
炎の槍や矢に運悪く当たった者は仲間を巻き込んで燃やしていく。一体がそれらを無視してリンゼに目掛けて爪を伸ばす。だが、その爪が彼女に届くことはなかった。
肉を打つ重々しい響き、内臓が潰れる感触。
リンゼの前にエルゼが割って入り、自慢の拳で突き飛ばした。拳を直に喰らったリザードマンは背後の木に背中を強く強打して、その場に倒れ込む。
まだ倒し切れていないと察するが、今は無視してエルゼは次に襲いかかってきたリザードマンの爪を躱し、再び拳を叩きつけた。
骨は砕かれ、眼球や脳が飛び出ていき、確実に相手の顔面を破壊して息の根を止める。
しかし、何度もブーストを使った疲労かやや動きが鈍り、その次に迫る爪に反応が遅れた。

八重が疾駆し、ユミナが矢をつがえ、リンゼが魔法を詠唱しているが間に合わない。
爪がエルゼの顔へ触れようとした瞬間、黒緑の疾風が目の前を通り過ぎた。
エルゼを襲おうとしたリザードマンは錐揉みしながら巨木の幹に激突し、構成していた中身を撒き散らす。
先程、通り過ぎた黒緑の影は着地と同時に近くにいたリザードの顔を棒状なもので殴りつける。
リザードマンはその速度に反応できず、首を二、三周させて仰向けに倒れた。
エルゼはその黒緑の影に見覚えがあった。いや、エルゼだけでなくリンゼにもある。
影の正体は――土谷惟真だ。
「何でアンタがここにいんのよ!?」
「この道をたまたま通りかかっただけだ」
そう言いつつ、惟真は覿面のリザードマンを愛用のトンファーで粉砕していく。
エルゼも続いてガントレットを血に染めながら、リザードマンたちの体を壊していった。
救援に駆けつけた八重が、リンゼやユミナに近づく者たちを切り落とし、ユミナとリンゼは魔法を詠唱して相手を倒していく。
あっという間にリザードマンたちは蹴散らされ、その場は鎮圧した。

そして事後報告のため、冒険者ギルドへと戻ることに。
「危ないところを助けていただき、ありがとうございました」
事後報告をした後、建物の前でユミナが代表して礼を言う。
「礼はいい」と流す惟真。「別に助ける必要もなかったわけだしな」彼女たちの実力を認めていた。
「それでもエルゼ殿の身が危なかったのは確かでござる」
「べ、別にアンタの助けがな、なくたって、どうにかできたわよ」
八重の言葉にエルゼは否定する。もっとも自分の身が危険に晒されていたのは、誰よりも理解している。
けれど、認めると負けた気がして、中々肯定できない。
「あの……また会えて、嬉しい、です」
素直になれないエルゼをよそにリンゼはおどおどしながらも惟真に声をかける。
「おう、そうだな。元気そうで何よりだ」
「その、土谷さんも元気そうで……」
か細い声で返事をするリンゼ。その隣にいるエルゼは「今までどこをほっつき歩いていたのよ?」と訝しげな表情で尋ねる。
「今までって……普通にクエストをこなしていただけだぞ?　まぁ、もっぱら馬車の護

衛ばっかだったけどな」
今までにないぐらい惟真は苦い表情をする。ひょっとすると馬車が苦手なのではという疑問がリンゼの中で生まれたが、それは押し留めることにした。
「んじゃ、俺はこれで。じゃあな」
話が落ち着くと惟真は彼女たちに背を向けて歩き出す。そして右手を軽く掲げて振った。
「ちょっと待ちなさいよ！」
このままでは伝えたいことが伝えられないとエルゼは焦り、惟真を呼び止める。彼はエルゼの声に反応し、足を止めて振り返った。
黒緑の瞳は相変わらず落ち着いており、何を言っても受け止めてくれそうな優しさがあった。
「あ、あたしの名前は、エルゼ・シルエスカ！　今度、アンタをぶっ飛ばす奴の名前よ、覚えておきなさい！」
指差して強気な発言をするが、エルゼの顔は茹でたタコのように真っ赤になっており、本人としては格好がつかない状態となっている。
それでもこれだけはと思い、口走ったのが挑戦状。これで良かったのかは本人も分かってない。

けれど、惟真は怒ることもなく「そうか、楽しみにしている」と静かに微笑んだ後、再び踵を返して歩いて行く。「じゃあな、エルゼ」背中越しの言葉だが、エルゼの耳に深く残った。

「うっさい！　バーカ！　気安く呼ぶんじゃないわよ！」

初めて名前を呼ばれた照れ隠しにエルゼは思わず反抗する。周りのメンバーは素直になれない彼女の言動に笑いを堪えるばかり。

そんな姉の反応にリンゼは思う。

――お姉ちゃんにもヒーローがいて、良かった。でも、私だって、お姉ちゃんのヒーローになりたい。

リンゼもまた惟真に対して、静かに対抗心を燃やしたのであった。